

平成 24 年 9 月定例会 決算特別委員会会議録（第 2 号）平成 24 年 10 月 16 日

◆佐々木茂光委員

今までも消防団にかかわっているいろいろな質疑があったわけですが、私のほうからも、今回、先ほど来言われているように消防団が沿岸部で多くの犠牲になったわけでありまして、我々はそれを教訓として、しかと形にして、消防団のこれからの活動にも当たっていただかなければならないと考えております。そういった中で、これからも消防団の活動というのは強く求められるところもありますが、改めて、消防団の役割、そしてまた団員の安全確保について、現段でどのように考えられているのかお伺いいたします。

○防災消防課長

今回の震災におきましては、消防団の活動の重要性が改めて認識されたと考えてございます。一方で、90 名の方が活動中に殉職されたということでございます。この教訓を踏まえまして、県では、消防協会としっかり連携しまして、震災時の消防団の活動を検証して、災害時における消防団の活動指針の取りまとめを進めているところでございます。いずれ、今後、この活動指針等を活用するなどして、市町村に対してその活動マニュアルの策定を促すなどして消防団の活動の安全確保に努めてまいりたいと考えているところでございます。

◆佐々木茂光委員

既に 1 年 7 カ月たっておりまして、さらに消防団はもう活動されております。団員の方々に多くの犠牲を見たというのは、やはり消防団としての消防精神、皆さんの程度それを承知しているか。私も消防の一人として活動したときは常にそういうものが気持ちの前面に出てきてしまって、それが最終的には大きな犠牲を払ってしまったのではないかと私なりに思うところがありますが、であるがゆえに、生業の傍らそれぞれボランティア活動の中で活動している。最終的に自分の命を落としてしまう、このぐらいむなしさというのはないと思うんです。そういったところを皆さんがどのように感じているのかということなんです。どんどん時間がたっていけばたっていくだけそのように薄れていくわけですよ、感情的なものも含め。多くの家族、お父さんを亡くした、団員を亡くした中で、子供がいる、奥さんもいる、そういう家族の中で大切な人を亡くしているわけだから、それらに対して早く応える意味でもその辺はもっと明確にしてやっていかなければならないのではないかと思います。その辺はどうですか。

○総合防災室長

消防団の活動につきましては、今回の 3.11 を含めまして、当然のことながら、常備をお手伝いするという言い方はおかしいかもしれませんが、そういった姿、また、地域においては地域の防災リーダーとして御活躍いただいている、それも生業の傍らということで本当に頭の下がる思いでありますし、今回の 3.11 につきましてもそういった熱い心で避難誘導、もしくはそれよりも先に水門閉鎖等、活動されて殉職された方がたくさんいらっしゃる。本当につらい思いをしております。

そういった意味で、実は、昨年度には既に沿岸の消防団長ほか警防の担当の団員の

幹部の方等にお集まりいただきまして第1回の委員会を開きまして、そういった状況を把握しながら、意見も聞きながら、本年度、それに基づきまして現地で詳細な調査をして、その上で地域地域に合った安全対策を講じる必要があるであろうというふうな動きで現在に至っているものでございます。その点につきましては御了解いただければと思っております。

そういった意味で、いずれ地域の防災のかなめといえますか、担う重要な消防団の方々の安全確保というのは本当に重要だと思っておりますし、また、今、消防協会で行っていただいております中間報告を見せていただいておりますけれども、現地で活動された沿岸の消防団の方々のいろいろな現場での経験とか声が拾われております。こういったものを踏まえて、協会と一緒に、実効性のあるといえますか対策を講じてといえますか、結果報告というものを出してまいりたいと思っております。

◆佐々木茂光委員

そういう強い思いで取り組んでいただきたいと思えます。

それで、消防団の有事の場合の役割の中に、水門門扉の閉鎖ということで、水門門扉があるうちはその閉鎖に当然携わっていかなければならないということになるんですが、これからいろいろまちづくり等を含めまして、その辺の設置、例えば復旧するというと今までと同じまま復旧していくわけですね。それが今回、そういったものに対して見直しされるものがあるのかどうか。改めて見直していかなければならないというところもあるんですが、その辺の考えがありましたらお示し願いたいと思えます。

○防災消防課長

水門等の設置に対する考え方についてでございますけれども、今般の大震災津波におきまして、多くの消防団員の方がその閉鎖中といえますか閉鎖後に亡くなられているというようなことでございますので、県の地域防災計画を見直しまして、水門や陸閘については、操作の電動化、遠隔化あるいはその通信手段、電源等の多重化を図るものとするところといたしております。

◆佐々木茂光委員

結局、電動化何とかということになると、有事の際は電源が切れてしまうと。例えばその機能が、要するに機能しないがために閉めるのに団員が時間をかけているということです。確認に行っているんですね。そういう人たちも犠牲になった人たちの中にいるということです。だから、同じ場所にまた同じものを設けるのが果たしていいのか悪いのか。いいわけがないですね。私が言っているのはそういうところなんです。例えば今まで三つあったものを一つにするとか、もっと単純な構造のものにするとか、その辺の見直しも含めて取り組んでいかないと、本当に亡くなった人たちの思いというのは生かされないと思うんです。その辺、お願いします。

○総合防災室長

これは我々のほうでお答えするのがいいのかあれですけども、東日本大震災津波復興計画の中で、海岸保全施設につきましては、つくる側のほうでも、そういった電動化につきまして、今回、先ほど現場の検証等もお話ししましたけれども、行ったら停電で閉まらなかったという声もいっぱい上がってしまっていて、そういったものも踏まえながら、電源の確保とかそういったものも、また、もうつくらなくてもいいように、越えられるようにとか、そういう工夫をしていただいております。関係部局とも連携をとりながら、そういった対策を我々見てまいりたいと思いますし、加えまして、一つ今回の検証の中で挙がっているのは、こう言うことあれですけども、やっぱりある時期になったら、閉まらないなら逃げていただくしかないのかなと。ソフト面という言い方がいいのかどうかですけども、そういった安全対策もあろうかと思っております。そういった消防団の活動につきましても、ソフト、ハードを含めたそういった見方というのが必要だと思っておりますので、関係部局との連携とともに、我々のソフト面というかマニュアル的な対策についても考えてまいりたいと思っております。

◆佐々木茂光委員

今、お話をいただいて、消防団を一応預かっているわけですよ。預かりの身であるわけですから、消防団がどういうふうな形の中で犠牲になったかというのは、それはまさに横断的に、つくる側と考える側が別々であってはならないと思うので、その辺は強く意見を出しながら生かせるものにしていただきたいと思います。